

『きみに読む物語』



©MMIV NEW LINE PRODUCTIONS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

流した涙は心が望んでいたもの こんな時代だからこそ、純愛を。



この日、α-Stationの試写会で上映されたのは、『マディソン郡の橋』を超え、昨年の夏に全米1200万人を涙で包んだ世紀のロマンス『きみに読む物語』。その原作の『THE NOTE BOOK』は'96年の発売以来、ニューヨーク・タイムズ・ベストセラーリストに56週にわたってランクインし、発行部数450万部を越えた大ベストセラー小説だ。

上映1時間前から、会場となった京都産業会館のシルクホールは、α-Stationのホームページをはじめ新聞などの公募に当選した700人の大行列。顔ぶれも学生からOL、そしてヨン様の影響か、先の韓流映画に触発された純愛ブームに、若かりし頃の恋物語を取り戻した(?) 中年女性までと実に多彩。

エンディングのテロップが流れ、涙ぐみながらホールからでてくる人たちに訊いてみた。この映画はどうでしたか? ——「感動

しました」。誰に訊いても、口にするのはこの言葉ばかり。

言葉にできないほどの感動に心を強く揺さぶられたとき、人は感涙を覚えるもの。それを言葉にしようとしても、そうスラスラと並べられるだろうか。きっとこの日集まった人たちは、いつの間にか忘れていた大切なものを取り戻したはずだ。だからこそこの言葉、「感動しました」が出てきたのだろう。出会い系サイトのコンビニエンスで枯れた恋愛が蔓延る現代に必要なのは、ひとりの男と女が、ガチンコで繰り広げる純愛映画のサブリメントなのかもしれない。

~STORY~

過去の思い出を全て失った初老の女性。その療養施設で暮らす彼女のもとへ定期的に通う男性・デュークは、彼女へある物語を読み聞かせている。彼が話すのは、互いに愛し合いながらも戦争や身分の違いから引き離されるノアとアリーの物語…。この実話をもとにした純愛物語に張り巡らされた伏線がエンディングに向けて繋がっていく——。



私は一足早く飛行機の中で観たんですけど、ウチの母親も感動して胸で号泣してましたよ。割と年代に関係なく受け入れられると思いますね。やっぱり全く違う世界を見せてくれる男の人に女は惹かれるわけですよ。負け犬だとか言葉で誹らされている時代ですが、純粋に人を愛することの大切さを描いた作品ですね。『幸せはつかむものではなく、感じるもの』そんな風に思えた深い映画でした

当日の司会はSUNNYSIDE BALCONYでお馴染みの森夏子さん(毎週月~金 11:00~15:00ON AIR)



「感動は告知されてた以上でした!」と、α-Stationのホームページから応募した学生さん



なんとα-Stationの試写会参加は4回目のカップル。「悲しい結末を予想してただけ…(結末は映画館でお楽しみください)」



『きみに読む物語』を配給するギャガの佐々木さん。先に封切りされた『オペラ座の怪人』は前売りで1万枚を売り上げる快挙を成し遂げたそう



仕事終わりに駆けつけた姉と、学生の妹はα-Stationの試写会は2回目だそう。「感動を通り越して、幸せな気分になりました」